

11 障害児教育

関 和典・中田美緒・梶山雅司・金子和代

1 研究テーマのとらえ方

(1) 養護学級の教育目標と「自立に向かう子どもたち」像

本学級では、「生活力のある児童」をめざしている。「生活力のある児童」の姿として次の3つの力を描いている。

- ・ことばや行動で自己を十分に表現し、主体的に行動する力
- ・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で、生活や学習をする力
- ・いろいろな場面で判断したり、工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この3つの力を総合すると、「児童がその子なりの考えをもち、よりよい方向をめざして進んで考え、判断し、表現していく（行動していく）力」であり、この力をもつ児童が「自立に向かう子ども」と考える。

(2) 人やものとのかかわり

児童が学校生活においてかかわる人は、友だちや教職員であり、かかわるものは、校内や教室に環境として設置されている物品や教材・教具である。児童の1日の学校生活を細かに見ていくと、多くの人やものとかかわっていることがわかる。その中で最も多くかかわっている対象、またはかかわってほしいと指導者が願っている対象は、友だちである。友だちとのかかわり方は、児童の実態によりさまざまである。直接的なかかわりもあれば、ものを介してのかかわりもある。いずれにせよ友だちとかかわることにより、ふれあいが生まれ、会話が生まれ、心の葛藤が生まれる。小さなかかわりの積み重ねが、児童の心を刺激し、鍛え、豊かにしていく。それが、自立に向かうための要因になっていくと考える。かかわる活動を通して、児童一人一人がかかわる楽しさを感じたり、かかわることに自信をもったりしながら、社会や多様な集団の中で自分らしさを発揮し、表現していくことができるようになることを願っている。

2 研究推進について

(1) 個々の実態とかかわりの場

児童がどのように人やものとかかわっていくか、一人一人の実態は異なっている。したがって、かかわりの場は、個々の実態によって設定される必要がある。そこで、単元全体の中のどこでかかわっていくか、1単位時間の中のどこでかかわっていくか、どのようなかかわりをするのかを明らかにしていった。そして、個々の目標行動の中に、かかわりに関する内容を設定していくようにした。

(2) かかわりを視点においた支援の捉え方

本学級では、めざす子ども像の具現化に向けて、次のような活動や場を設定し、実践を積み上げてきている。

- ①自己決定する場や活動の設定
- ②社会や多様な集団でのかかわりの場の設定
- ③学習の汎化を図る場や活動の設定

本年度も、本学級が作成した独自の表（次頁）をもとに、「選択についての実態」と「集団へのかかわり」から「支援」のあり方を探っていった。

研究テーマ「人やものとかかわることを大切に」を取り組み始めて本年度は三年目となる。はじめて取り組んだ一昨年度は、②についての研究を深め、〈集団へのかかわり〉の一部を児童の実態から見直し、「友だちとのかかわり方」の捉えについて検討してみた。児童の「友だちとのかかわり方」は、大きく「自己主張しながらかかわる」段階と「自分と友だちとの考えを比較し、調整を図りながらかかわる」段階があるのではないかと考え、〈集団へのかかわり〉の捉えをよりスモールステップに細分化した。

昨年度は、〈集団へのかかわり〉を児童の実態をもとにさらに詳細に示していくとともに、かかわりについての〈支援〉をどのように捉えることができるか探ってきた。

今年度は、表の〈集団へのかかわり〉の部分のより一層の細分化を図り、個の実態をしっかり見ていきながら、個別の支援について明らかにしていった。そのするために、個別指導計画をたて、集団とのかかわりをはっきりと捉えつつ、個々への対応も細かく行ってきた。

〈選択についての実態〉	〈 支 援 〉	〈集団へのかかわり〉
偶然手にした方を選んで いる。	・児童が好んでいるものを 選択肢にする。	指導者といっしょに活動 をする。
友だちや指導者の模倣に よって選んでいる。	・選択肢のイメージをもつ ことができる具体的な手 かかりを示す。	指導者のことばかけで活 動をする。
好き、嫌いの好みの視点 が明らかになって選んで いる。	・模倣できる場を多く設定 する。	友だちの動きを手がかり に活動する。
友だちや指導者の活動へ の関心から選んでいる。	・児童が特に好んでいる活 動の中での選択場面を設 定する。	集団での活動の仕方がわ かり自己主張しながら友 だちとかかわって活動す る。
友だちや指導者の活動を 見て見通しをもった方 を選んでいる。	・過去の類似の体験をイ メージすることができる 具体的な手がかりを提示 する。	集団での活動の仕方がわ かり自分と友だちの考え を比較し調整を図りなが らかかわって活動する。
過去の経験から見通しの もちやすい方を選ん でいる。	・児童が課題と捉えている ことについて課題達成ま での見通しをもつことが できるような具体的な手 かかりを提示する。	
自分にとって乗り越えな ければならない課題の有 無で選んでいる。		

3 研究の成果

(1) <集団でのかかわり>について

今年度は、昨年度同様、児童が友だちとより多くのかかわりを持ち、質的に上向きなかかわりをもつことができるよう、個々の実態をより細かく見て支援するための「個別教育計画」の作成を始めた。そのことがきっかけとなり、児童個々のかかわりの様子を昨年度より詳しく見ていくことができた。

さらに、昨年度より、リーダーを育てていくことによって、集団での活動で児童の企画・運営による学習がスムーズに行うことができるようになってきた。

かかわりの質については、児童が実際にかかわって生活や学習をしている場面を取り上げ、教員同士がどのようにそのかかわりを捉えているかということについて話し合いを行った。そうしていくことで、共通的な確認事項や課題が明らかにすることができるようになった。

※ 個別教育計画とは、児童がそれぞれの発達段階の中で、現在の発達課題を捉えて支援していくための指針となるものである。この作成にあたっては、以下の点に考慮した。

1. 児童が現在おかれている発達の状況を細かく観察する。
2. 児童が家庭でどのような生活を送っていて、保護者が児童に対してどのように成長・発達をして欲しいのかということ、家庭訪問、通常連絡帳、または電話等で細かく聞いていく。
3. 保護者との合意のもとに、児童の課題についてそれぞれの教科・領域、合わせた指導、総合的な学習の時間において、児童の課題を実践していくための指針づくりをする。

ただし、現在この個別教育計画はまだ改善するべきところがあると考えられるので、次年度の課題としたい。

4 今後に向けての課題

(1) 個別教育計画の本実施と充実

前述したように、今後「個別教育計画」は本学級で重要な研究課題となるものである。さらに中学校・大学との連携のもとに、共同研究も3年間の最初のスタートを切った。

来年度は、この「個別教育計画」を研究の根幹に据えて、個々の実態をしっかりと把握し、それに応じた支援をしていくことを主として考えていきたい。そのために、各先進校の実践を参考にしたり、大学の教授を招いての授業研究を行っていきながら、よりよいものになるように実践を深めていきたい。

(2) 総合的な学習の時間の再考

本年度、実験的に低学年にも「総合的な学習の時間」を設置して実施してみた。今年度より、教科・領域を合わせた指導についての再編を行い、「生活単元学習」「あそび学習」「日常生活の指導」をおこしたが、これについての検証を行いつつ、「総合的な学習の時間」との関連や、その時間数、実施学年についての検証を行うことが必要である。

このことも、実際に「総合的な学習の時間」を実施している各校の実践を参考にしながら、本校独自のあり方を模索していきたい。